

「時危うくして、偉人を思う」

徳富蘇峰と森中章光先生

吉田 曠 二

「時危うくして、偉人を思う」この言葉は今から20年前、新島研究にその生涯をささげた森中章光さんが96歳のとき、母校での最後の講演で語った新島襄の言葉である。この言葉は新島先生が存命中の日本にも、現在の日本にも、なおも当てはまる警鐘であろう。

これから21世紀の日本はどこに向かうのか？ 同志社大学もまたどこに向かって進もうとしているのか？ 晩年、森中先生のお宅を訪問したとき、森中さんは同志社の前途にも、日本の前途にも思いを馳せ、いまや黄色の信号が点滅している時期であると話されたことがあった。はたして、今、森中さんは天国で新島先生とどのような会話を交わされているだろうか？ 今の同志社には、人間の自由に対する誇りと尊厳が足りない。政治的不義、不合理に対する義憤の心が不足している、といわれているのではなからうか？

新島先生は常に大なる義憤のこころをもち、政治的不義、不合理に対しても、良心の声に照らして毅然と挑戦するというタイプの教育者であった。しかし今の同志社教育に、国家権力にたいして、その傲慢な権力行使に毅然と抵抗する精神が、継承されているのだろうか？ あるとすれば、同志社教育の現場で、どこにその姿が存在しているのか？

この点、新島の門下生であった徳富蘇峰や森中さんは、どのような思いで同志社と日本の現状を眺めておられるか？ 私はこの二人の先人が書き残した著作と文章から、その片鱗を追求してみたいと考える。

（1） 徳富蘇峰：その帝国主義思想と権力批判の姿勢

徳富蘇峰は明治9年に同志社英学校の門をくぐり、新島の人格教育を受

け、その平民主義に感化された若者であった。徳富と恩師新島の師弟関係については、多くの文献に紹介されているので、今回は省略するが、徳富の生涯は新島の自治独立の精神と平民主義を貫いた点では、たとえその対外膨張論が帝国主義であったにしても、生涯一貫して新島の門下生であったことを否定できない。徳富はその生涯を通じて約400冊に及ぶ著書を後世に残している。その代表作は「近世日本国民史」100冊の大作である。これは明治10年、徳富が同志社に在学中に発起した作品で、徳富はその著作の夢を56歳になって実現すべく決意し、90歳の晩年ようやく完成したライフワークである。この著作で徳富は何を明らかにしようと目指したのか？彼は明治維新を描くことに執念をもやしたが、その歴史的背景としては、織田信長の尊王思想と対外交流の発展を評価し、その功績を明治維新の源流とし、さらに豊臣、徳川にいたる歴史の流れのなかでは、豊臣の朝鮮出兵の失敗、その経綸の無さを批判し、さらには徳川の封建制と鎖国の関係についても、独自の見解を提起し、徳川幕府の権力政治に容赦のない批判をあげせかけた。この点、蘇峰は心底からの天皇崇拜論者であっても、単なる権力崇拜の曲学阿世の歴史家ではなかったことになる。その著作の原点には、恩師新島流の平民主義と人間の自治自由への憧れがつねに底流に潜んでいたように思われる。蘇峰は言論人としても国家に正面から、毅然として対決し挑戦したのである。

(2) 徳富の門下生としての森中章光先生

私が「近世日本国民史」など徳富蘇峰の著作とその歴史家としての活動に興味を覚えたのは、京都での森中さんとの出会いとその感化を無視できない。

森中さんと私の出会いは今から、およそ30余年も前のことになるが、森中さんは岩倉の同志社高校に近い自宅で私を相手に、蘇峰について、しばしば長談義をされた。それは蘇峰の存在と激励があつて、はじめて森中さんの新島研究の継続がありえたという事実を私に伝えようとされたからでもあろう。森中さんが新島研究に手を染められたのは昭和の初期（満洲事

変前後)であったが、当時はまだ同志社で誰も新島研究を本格的にはじめようとする人はいなかったらしい。

そのような同志社の状況は熱海で著作活動に専念する蘇峰の耳にも伝わったものか、ある日、森中さんが蘇峰の別荘を訪問したとき、蘇峰は森中さんを前にして、今日、新島研究を促進する人はお前さんひとりだ、「新島研究の発展は貴君の双肩にあり」と、まで激励している。若き森中さんは、すでに新島研究一筋で、新島の英文資料を読むために、地方公務員の職を辞めて同志社の夜学に再入学し、その生活のすべてを新島研究に捧げる日常であった。それは他人から強制されたものでなく、森中さんは同志社時代に波多野勝山先生から新島の人格教育と自主自由の精神を学びとり、その魅力に取りつかれていたからである。蘇峰はそんな森中さんを目の前にして、強靱な同志社人としての気迫を認識したものと思われる。蘇峰は大森の自宅や晚晴草堂に、自から森中さんをよびよせて、自分の生涯の恩師としての新島先生について、よく語り聞かせている（この蘇峰と森中さん二人の間には50通に近い文通もあった）。

折に触れ、蘇峰から聞かせてもらった新島の肖像は、森中さんを大いに勇気つけた。しかも森中さんは京都の同志社と熱海の蘇峰の間を往復し、戦後は大塚節治同志社総長と蘇峰との連絡にあたるなど、大いに戦中・戦後の同志社と蘇峰との連絡役としても活動している。

しかしその行動は単なるメッセンジャーボーイでなく、蘇峰から伝えられる新島先生の姿を当時の同志社人にひろく知らしめる情報のパイプ役でもあったことになろう。

森中さんがその生涯に書き残した膨大な日記をひも解けば、蘇峰の姿がしばしば登場する。その筆跡には、蘇峰から新島精神を学びとろうとする森中さんの意気込みのようなものが感じられる。

蘇峰は戦時中に「近世日本国民史」を執筆中も、貴重な時間を割いて森中さんと対話し、すぐれた新島先生伝を書くためには、「時局とは関係なく、客観的な目で、新島が残した歴史資料を研究することが大事だ」などと、歴史家としての節度についても助言する一幕もあった。京都の森中邸には、その書齋に蘇峰の「近世日本国民史」が二セットも置かれていた。

戦中・戦後の森中さんは蘇峰の著作と蘇峰との対話から何を学んだのか？私は蘇峰の口から森中さんは新島の自主独立の精神と不正義には毅然と対決する批判精神を学んだのではなかろうかと考えている。森中さんは人生最後の講演で、新島の言葉として、「時危うくして、偉人を思う」という言葉の意味を語られた。それは蘇峰から教えられた言葉でもあったろう。権力に対しては迎合するな、屈伏してはならない。新島先生は、たとえどのような権力者に対しても、義憤を感じたら、勇気をもって戦いをいどみかけた。それが同志社の建学の精神である、ということを最後に語られたものと私は理解している。

私は同志社の教育から、権力批判の言葉が消えたら、もはや新島の同志社ではなくなったものと考えている。新島は徳川幕府の鎖国体制のなかで、それに義憤を感じたがゆえに、1864年に安中藩の殿様のもとから脱藩し、新大陸の自由な精神を学ぶ道を選択した。新島には真理を追究するためには、百万の敵も恐れぬ。我ひとり行くの、勇気と実行力とゆるぎない信念があった。新島門下の徳富蘇峰も決して権力に迎合する曲学阿世の歴史家ではなかった。ましてや反動派の歴史家でもなかった。蘇峰は新島の「平民主義」の立場をその不遇の晩年まで堅持した人物であった。しかし今では新島と蘇峰の姿はかすんで見えない。新島や蘇峰なら警鐘をならすであろう日本の進路もまた雲にかすんで見えない、今日、同志社はどこに向かっているのか？われわれは、新島精神を掘り起こしたこれら先人の苦勞に今一度、思いをよせるべきであろう。日本の進路もその日その日の成り行き次第の感がする。風の吹くままに、その間隙をぬって曲学阿世の人間が「時危うくして、偉人を語る」ことにもなりかねない。繰り返すが、とくに歴史を学ぶ者は、「最初に井戸を掘った人の苦勞を心に留めて忘れないように」したいものである。

以上

追記：今年8月の新島研究会では、1400通に及ぶ新島書簡と新島宛て書簡などを収集、解説した森中先生の功績が同志社の内部でようやく認められた。しかし森中さんが編纂した岩波文庫版『新島襄書簡集』とその後刊行

された新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』の新島資料の異同について、伊藤彌彦先生が詳しく調査され、同志社談叢第24巻（2004年）114頁に報告されており、森中さんの死後21年が経過しても、なお森中さんに一つの疑惑がかけられたままで推移しているように思われた。その疑惑とは、森中は新島先生を絶対視するあまり、新島の不利になる記述は、その日記から抹消したという疑いである。今年8月、私が研究報告をした直後、森中さんから21年前に頂いた英文の *A Skech of the Life of Joseph Hardy Neesima, By Jerome D. Davis (1890)* をひも解いてみた。その時、偶然、本誌コラム欄に示すような森中さん自筆のメモが上記英文新島伝の22頁と23頁の間に貼り込んであるのを見つけた。そのメモには新島の「函館紀行」元治元年四月十一日の行に続けて、「原本（新島日記：筆者）はこの次の記事切取らる。察するに歙崎の悪風俗など記され、後年 先生没後何人かこの箇所を切取りたるものと想像される」と記入してある。私は偶然このメモの最後の二行半の記述をみて、アット驚き、日記を切取ったのは森中さんでないと確信した次第である。森中さんは新島関係資料をあの戦争の最中に戦火による焼失からまぬがれさせた救世主の一人であった。米国から帰国された直後の新島先生の苦労を想像すれば、それから約一世紀後の我々は、なんと平和で言論と学問研究の自由も保障されている。今、我々同志社人（新島の門下生）が、その研究対象にすべき目標は明治の国家権力に抵抗して、平民主義の立場で同志社大学を創設した先人たちのその志の追跡であろう。日本近代史上の英雄である新島とその門下生の歩んだ道を現代的な視点から直視することに専念したい。